文化学園リポジトリ
Academic Repository of BUNKA GAKUEN
服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学
Bunka Gakuen University
文化ファッション大学院大学
Bunka Fashion Graduate University
文化服装学院
Bunka Fashion College
文化外国語専門学校
Bunka Institute of Language

| | |
|---|---|
| Title | 『文化初級日本語I・IIテキスト改訂版』作成報告 |
| Author(s) | 国頭, 美紀; 白岩, 麻奈; 八田, 浩野; 廣田, 周子; 平川, 奈津子 |
| Citation | 文化外国語専門学校紀要 27 (2015) pp.1-22 |
| Issue Date | 2015-02 |
| URL | http://hdl.handle.net/10457/2205 |
| Rights | |

https://bunka.repo.nii.ac.jp/

# 『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ　テキスト改訂版』作成報告

日本語科 専任教授　国頭　美紀
日本語科 専任教授　白岩　麻奈
日本語科 専任教授　八田　浩野
日本語科 専任教授　廣田　周子
日本語科 専任講師　平川奈津子

・要旨
『新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』出版から 10 年が過ぎ、様々な面から改訂が必要となった。そこで教科書を構成する主な 3 つの項目「本文」「文型」「練習」の目標とそれぞれの関係を見直し、学習者にとってより理解しやすく運用力がつくように改訂を行った。本稿では 2014 年 8 月に出版した『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ　テキスト改訂版』の改訂方針や変更点について詳しく述べ、最後に第 13 課を例に課の構成や授業の進め方を紹介する。

・キーワード
『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』　『新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』　『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ　テキスト改訂版』　改訂　改訂方針　運用力

## 1．はじめに

本校では 1987 年に『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』（以下「文化初級」）を出版し、その改訂版である『新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』（以下「新文化」）を 2000 年に出版した。2 回目になる今回の改訂では、前回よりさらに大幅な改訂を行った。本稿では、まず、改訂に至った経緯と『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ　テキスト改訂版』（以下「改訂版」）作成の基本方針、次に「本文」「文型」「練習」の改訂方針と変更点について述べ、最後に第 13 課を例に課の構成や授業の進め方を紹介する。

## 2．今回の教科書改訂の経緯と基本方針

### 2－1．文化の初級教科書について

「文化初級」は、日本の高等教育機関への進学を希望し、初めて日本語を学ぶ学習者のための教科書として 1987 年に出版された。媒介語を使わず指導することを前提として作られたため、文型の使用場面や状況を具体的に示すための工夫が凝らされている。まず、でき

るだけ現実的な場面の中から学習者の生活に関連の深い場面を選んで本文を構成し、その中に文型を組み込んで提示してある。また、場面のイメージを伝えるために、多数のイラストが掲載されている。

その後2000年には「文化初級」の改訂版として「新文化」が出版された。「新文化」は「文化初級」の目標や特徴を引き継ぎつつ、本文のトピックの変更や文型の追加、削除などの改訂を行ったものである（詳しくは本校紀要第14号参照）。

## ２－２．今回の改訂の経緯

今回２度目となる改訂を行ったのには、いくつかの理由がある。

まず、「新文化」の出版から10年が過ぎ、時代の流れと共に社会情勢も変化した。特に電子機器類の発達は目覚ましく、携帯電話やパソコンの普及によって、友人の家に電話をかけ、その家族に電話を取り次いでもらうことや、手紙を書く機会なども少なくなった。そのような変化に対応し、教科書の内容を新しくしてほしいという声が国内外から寄せられた。

また、学内では「新文化」の文型の提出順を変え、より指導しやすい順序で教えることが多くなった。例えば「新文化」では動詞を第６課で指導することになっているが、もっと早い段階で学習者とのコミュニケーションがとれるよう、第２課の学習前に基本的な動詞を指導し、学習者に余力があれば、過去形も指導するようになった。

さらに本校に在籍する学生の主な進学先である専門学校から、日本語学校卒業時にＮ２程度の日本語力をつけるよう要望が上がるようになり、本校入学時ゼロスタートの学習者も１年でＮ２の実力をつけることが必要となった。そのため、初級の学習を効率よく行う必要が出てきた。

このような学内外からの声に応えるために、2010年度より改訂作業を行うことになった。

## ２－３．改訂の基本方針

今回の改訂にあたり、「文化初級」が目指していた「初級文法を体系的に習得し、応用力を積み上げられるような土台を作ること」「日々の生活の中で、コミュニケーションができるようにすること」の２点をさらに強化するため、「本文」「文型」「練習」の各項目の目標を作成メンバー間で再確認した。それぞれの目標は以下の通りである。

本文：文型の使用場面を理解すると共に、日本文化、日本社会への理解を深める
文型：意味と形、使用場面をしっかり理解する
練習：文型の形や使う語彙を確認し、それを使って自分のことが話せる

さらに各項目の関係ももう一度見直し、「文型（例文）で学習したことを練習で身につけ、本文で文型や練習で学習したことの確認をしたり、理解を深めたりする」ということを確認した。

これらのことを踏まえて改訂するために、今回は、前回に比べ大幅な改訂が必要になった。例えば、前回の改訂では、副教材として出版されている『楽しく聞こう』『楽しく読もう』『楽しく話そう』がそのまま使えるように配慮したため、文型の提出順序の大きな変更などは行えなかった。しかし、今回の改訂では副教材との対応より改訂すべき内容を優先し、文型の提出順序はもちろん、取り上げる文型や練習内容などについてもすべて見直すことにした。

## ３．各項目の方針と改訂点

### ３－１．本文

#### ３－１－１．本文の改訂方針

本文（ほんぶん）はその課で学習する文型が使われる場面や状況を提示したものである。学習者に関連のある、身近でわかりやすい場面を選んでストーリーを構成し、学習した文型がどのような場面や状況で使われるかがわかるようになっている。また、学習者が同じような場面に出合った時、言葉を置きかえることによって、自分のことが表現できるように配慮されている。改訂にあたっては、「留学生にとって、より身近でわかりやすい本文にする」ということを基本方針にして、すべての本文の場面を見直し、それぞれの文型が使われる場面や状況がよりはっきりと学習者にわかるようにした。場面を見直す際には、日本語を学ぶ留学生が教室から日本の社会へと活動の範囲を広げていくことを意識してストーリーを工夫し、留学生が登場する場面を増やしていくことにした。また、本文を学習しながら、日本語だけではなく日本で生活する上で必要な知識も学べるようにすることも目指して改訂作業を進めた。

#### ３－１－２．改訂された本文

「改訂版」では、ほとんどすべての本文を改訂したが、その中で本文の場面や話題を全面的に改訂したものは以下の通りである。

| 「新文化」 | → | 「改訂版」 |
|---|---|---|
| 第１課　テストは９時10分からです。 | | 第１課　私はワン・シューミンです。 |
| 第６課　吉田さんの一日、佐藤さんの一日 | | 第６課　どんな映画が好きですか。 |
| 第９課　使い方を教えてください。 | | 第９課　説明をよく聞いてください。 |
| 第13課　留学生の生活意識 | | 第13課　インタビュー調査 |
| 第21課　訪問 | | 第21課　ホームステイ |
| 第18課　朝食と健康／第24課　贈り物 | | 第23課　電子書籍が増えてきました。 |
| 第35課　お待たせしてすみませんでした。 | | 第27課　進学準備 |
| 第36課　先輩にいろいろなことをさせられました。 | | 第34課　お祝い |

（1）留学生が活動の場を広げていくことを目指して改訂したもの

留学生が活動の場を広げていくことを強く意識して改訂したのは、第1課、第13課、第21課である。第1課は、「新文化」では「学校の廊下で学生が先生にテストの時間や休みについて聞く」という内容のものであったが、「改訂版」では「日本語学校の教室で留学生同士があいさつをする」「学生寮で留学生と日本人の寮生があいさつをする」という場面に改訂し、日本語の学習を始めたばかりの留学生であっても、初めて会った人に簡単なあいさつができるようになることを目指した。

また、第13課は、日本人の記者が大学のキャンパスで留学生にインタビューするという内容であったが、今回の改訂では、留学生が日本の大学へ行って日本人学生にインタビューし、その結果を教室で発表するという内容に変えた。

第21課は「新文化」では日本人の大学生が恩師の家を訪問するという場面を取り上げ、日本の訪問のマナーを知ることを目標にしていたが、「改訂版」では留学生が日本人家庭にホームステイするという場面に改訂した。留学生の中にはホームステイを希望する者が多いが、実際にホームステイをする場合、日本人の生活習慣に戸惑うこともあるようだ。そこで、この課の本文では、はじめのあいさつ、玄関からうちへ上がる時の注意、食事のマナー、お風呂の使い方、帰った後にすることなどホームステイをする上で知っているとよいマナーや日本人の生活習慣が学べるようにした。

（2）トピックが古くなったために改訂したもの

本文のトピックが古くなったために改訂したのは第9課と第23課である。第9課は、留学生が学生寮の先生に寮の規則やコインランドリーの使い方の説明を聞く場面になっていたが、コインランドリーの使い方というトピックが古くなったため、図書館のオリエンテーションで本の探し方の説明を聞くという場面に改訂した。また、変化の表現が学習項目になっていた第18課は、「朝ごはんを食べない人が増えてきた」というテーマで作成した本文であったが、現在はきちんと朝食をとる人が増えていて現状と合わなくなっている。同様に贈り物がトピックになっていた第24課も贈答の習慣が変化したため改訂の必要が出てきた。そこで、「改訂版」では2つの課を合わせて第23課を作成し、「電子書籍が増えてきた」という内容のニュース番組に場面を変えることにした。この課の本文は特集番組のような設定で、アナウンサーが最近の電子書籍の売り上げの状況や、電子書籍の特徴などを紹介するモノローグと、電子書籍と紙の本とどちらのほうが好きかというインタビューである。

（3）テキストの対象者を意識して改訂したもの

学習対象者を意識して場面を変えたのは第27課である。本校の初級の教科書は「日本の大学や専門学校などへ進学することを希望している人」を対象にしており、「新文化」でも、教師に進路の希望を述べたり、教師と進路について相談したりする場面の本文（第11課、第20課）があったが、「改訂版」では、さらに進学準備を意識した話題を増やすことにした。具体的には「新文化」で日本人の会社員が経済セミナーに参加するという内容の本文（第

35 課）だったものを、「改訂版」の第 27 課では、留学生が日本人の高校生と専門学校のオープンキャンパスへ行くという場面に変えた。さらにこの課では「面接試験」の本の一部という体裁で本文を作成し、面接試験を受ける際に気をつけなくてはいけない基本的なことがわかるようにした。以上のような改訂を行った結果、「改訂版」では第 11 課、第 20 課、第 27 課の本文の学習を通して、進学準備の指導が段階的にできるようになった。

（4）その他の理由で改訂したもの

今回の改訂では場面や内容などに変更はないが、登場人物を日本人から留学生に変えた課がある。まず、第 7 課は財布を落として交番へ行く人を日本人大学生から留学生に変えた。また、第 12 課はテレビの料理番組で料理の先生が牛丼の作り方を説明し、アシスタントが質問するという場面であったが、「改訂版」では、留学生が日本料理のクラスに参加して牛丼の作り方を習うという場面に変更した。このように、本文の主人公を留学生に設定することで、学習者にとって身近な内容の本文になるようにした。

## ３－２．文型

### ３－２－１．文型の改訂方針

文型（ぶんけい）とは、その課で学習する新出文型を提示し、実際の発話に結びつけられるような例文を挙げたものである。学習者が効率よく日本語を習得できることを目標に以下のような点から改訂した。

・初級の学習項目として取り上げる文型を見直す
・学習者が触れる機会の多い学習項目を考え、習得しやすい順序で提出する
・学習者が遭遇する場面を考え、より適切な例文にする

以下、具体的な改訂例を述べる。

### ３－２－２．改訂された文型

提出する文型については、これまでの教師の授業での経験、日本語能力試験の「出題基準（文法）」旧 4 級、3 級の文型であるか、『文化中級日本語Ⅰ（以下「中級Ⅰ」）』に取り上げられているか、といったことを参考に選定し直した。改訂したものには、（1）テキストに新たに文型として取り上げた文型（2）提出箇所を大きく変えた文型（3）削除した文型がある。以下がその具体例である。

（1）新たに取り上げた文型

第 1 課文型 1　私はワン・シューミンです。
第 7 課文型 6　チンさんにお金を借ります。／ラフルさんにお金を貸します。
第 20 課文型 6　ふじ観光専門学校という学校を知っていますか。

例えば第７課文型６「貸す／借りる」は、「新文化」では語彙として提出していた。しかし、このような方向性のある動詞は学習者がつまずきやすいという教師の経験から、「～てください。」や「～てもいいですか。」といった文型が出る前に、しっかり文型として導入、練習しておく必要があると判断し、追加することとした。

（２）提出箇所を大きく変えた文型

提出箇所を変えた例としては次の①から④がある。

① 提出を早めたもの
② 提出を遅くしたもの
③ まとめて提出したもの
④ 提出する課を分けたもの

以下、それぞれの文型を挙げ、改訂理由の例を述べる。

① 提出を早めたもの

| 「新文化」 | → | 「改訂版」 | |
|---|---|---|---|
| 第６課 | | 第２課 | 動詞（ます形現在） |
| 第７課 | | 第２課文型６ | 見ました。／見ませんでした。 |
| 第22課 | | 第17課文型１ | ピアノが弾けます。 |

「動詞（ます形現在）」は、「～に～があります。」という存在文の後で指導することが多いと思われる。本校でも以前はその順番で指導していたが、それでは簡単なコミュニケーションができるまでに時間がかかるという問題があり、改訂作業を始める前から、早い段階で指導するようになっていた。「改訂版」ではその指導の流れを汲み、第２課で動詞のます形の現在形と過去形を提出し、早くから簡単なコミュニケーションができることを目指した。

その他にも理解が難しくないなどの理由で提出を早めたものがある。

| 「新文化」 | → | 「改訂版」 | |
|---|---|---|---|
| 第18課 | | 第10課文型３ | コーヒーを飲みながら話しています。 |
| 第27課 | | 第17課文型４ | 学校が忙しくてあまり行けません。 |
| 第31課 | | 第19課文型２ | 少し短くしてください。 |
| 第33課 | | 第20課文型３ | 観光の勉強をするために、専門学校に行きます。 |

目的を表す「ために」は、「新文化」では同じく目的を表す「ように」の後で提出されていたが、用法がより理解しやすい「ために」を先に提出したほうが効率的に学習できると判断した。

② 提出を遅くしたもの

| 「新文化」 | → | 「改訂版」 | |
|---|---|---|---|
| 第 18 課 | | 第 23 課文型 1 | 電子辞書が増えてきました。 |
| 第 13 課 | | 第 23 課文型 4 | 紙の本は、デザインがきれいだし、<br>大きさもいろいろあるし、見るのが楽しいです。 |

「新文化」で第 18 課に提出されていた「～てきました。」は、社会的な変化を述べることに使用されることが多い。そのため、語彙がもう少し増えた時点で学習した方が理解しやすいと考え提出順序を遅くした。

③ まとめて提出したもの

| | 「新文化」 | → | 「改訂版」 |
|---|---|---|---|
| い形容詞 | 第 3 課 | | 第 4 課　い形容詞　な形容詞 |
| な形容詞 | 第 4 課 | | |
| ～のようです。 | 第 31 課 | | 第 32 課文型 2<br>歌手のようです。／みたいです。 |
| ～のように薄いです。 | 第 33 課 | | 紙のように／みたいに薄いです。 |
| お～ください。 | 第 21 課 | | 第 30 課文型 2　お待ちください。 |
| 敬語 | 第 30 課 | | |

比喩表現「よう／みたい」は「新文化」では文末にくるか、副詞的に使うかによって別の課に別の文型として提出していたが、意味も文構造もそれほど難しくないと判断し、同じ文型としてまとめて提出することにした。

④ 提出する課を分けたもの

| 「新文化」 | → | 「改訂版」 | |
|---|---|---|---|
| 第 22 課文型 1 | | 第 17 課文型 1 | ピアノが弾けます。 |
| 第 22 課文型 4 | | 第 20 課文型 4 | 進学説明会に行けば、いろいろな学校の<br>先生と話せます。 |

可能形と「～ば」の形はその形が似ているため、同じ課で学習すると学習者が混乱しがちであったので、別の課で提出することにした。また、可能形は意味的にもわかりやすく使う機会も多いため、①で挙げたように本校では改訂前から提出を早めて指導していた文型でもある。

（３）削除した文型

「新文化」

第５課文型５　Ａ：この階にお手洗いはありますか。Ｂ：はい、あります。
あそこです。／いいえ、ありません。３階にあります。

第７課文型８　小野さんの財布じゃありませんか。

第 10 課文型１　２時２１分　（1 分単位の時間の言い方）

第 10 課文型４　新館の部屋は洋室で、旧館の部屋は和室です。

第 12 課文型２　もっと大きく切ってください。

第 13 課文型２　日本での生活は楽しいですか。

第 15 課文型４　関東バスも西武バスも通ります。

第 17 課文型１　沖縄、九州地方は雨でしょう。

第 19 課文型５　この近くにいるはずです。

第 22 課文型３　ピアノなら弾けます。

第 23 課文型４　あんなワンピースがほしいと思っていたんです。

第 23 課文型６　何か見たい物はありますか。

第 26 課文型３　電池の方向を間違えると、こわれることがあります。

第 31 課文型４　大きい荷物は預けることになっています。

第 32 課文型１　この雑誌にいろいろ書いてあります。

第 33 課文型４　検査は機械が自動的に行います。

第 35 課文型２　講演会はもう始まっていますか。

第 35 課文型４　今日の講演を録音させていただきたいんですが…。

第 35 課文型５　いくら読んでもわかりません。

第 36 課文型２　日本にいるうちにいろいろな経験をしてみたらどうですか。

初級で学習するよりも中級で学習したほうが理解が早いだろうと判断した文型、また初級では運用まで目指す必要がないと判断したものは文型として取り上げなかった。例えば、「はず」「うちに」などは「中級Ⅰ」に提出されており、中級で学習したほうが効率的だと考えたため「改訂版」からは削除した。また、「（明日は晴れる）でしょう。」や規則を説明する「（写真は撮れない）ことになっています。」などは理解ができればいいと考え、本文の中で表現として簡単に紹介する扱いにした。その際の授業での扱い方は『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ改訂版　教師用指導例集』の本文の欄に記述がある。

### ３－２－３．例文の改訂

文型を選定した後、例文についても見直した。その際、次の３つの点に留意して改訂した。

（１）文型の意味、機能、場面が理解しやすい例文にする
（２）普段の会話で使える生き生きとした例文を取り入れる
（３）文型を理解するだけでなく、話題が広がり、情報としても役に立つ例文を取り入れる

（１）の例としては第３課の文型１「名詞＋じゃありません。」が挙げられる。

Ａ：猫（ねこ）ですか。
Ｂ：いいえ、猫（ねこ）じゃありません。
　　犬（いぬ）です。

（テキストⅠ　第３課　42ページ）

名詞の否定形を示す例文に、このようなイラストを付けることによって話者が否定している意味がはっきりわかるようにした。ただ文を示しただけでは、場面や状況、発話意図がわかりにくい例文もこのような形でイラストを入れるなどして、学習者が身近に感じられる文、実際に使えそうだと思える文になるよう工夫した。

（２）の例としては、第18課の文型４、伝聞の「～そうです」が挙げられる。「～によると～そうです。」という単文だけでも意味を理解させられるだろうが、この文型をどういった時に使うのか具体的にわかるように、自分の得た情報を伝聞表現で伝えながら友達を誘うという例文にした。

Ａ：駅（えき）のそばの新（あたら）しいレストランへ行（い）きましたか。
Ｂ：いいえ。
Ａ：雑誌（ざっし）で読（よ）んだんですが、魚（さかな）がとても新鮮（しんせん）でおいしいそうですよ。
　　今度（こんど）いっしょに行（い）きませんか。
Ｂ：いいですね。

（テキストⅠ　第18課　208ページ）

このように、伝聞表現をただ人から聞いたことを機械的に誰かに伝えるのではなく、人を誘う時に使えることを示し、学習者が誰かを誘ってみようと思えるような例文にした。

（３）は文型を含んでいるだけでなく、そこから話題が広がり、情報としても役に立つ例文である。例文を通して生活の中で必要なことを学習者に提供し、そこから話題を広げていくことを目指した。例として第26課文型３、目的の「～ように」がある。

ラフル：何を買ったんですか。
チン：本棚が倒れないようにとめる道具です。
大きい地震が来ても安心ですよ。
ラフル：へえ、いい物があるんですね。

（テキストⅡ　第26課　94ページ）

日本に住む学習者には学校などでも避難訓練をしたり、防災情報を提供したりするが、このように例文に取り入れることで、耐震グッズや地震対策などの情報を同時に紹介することができる。

## ３－３．練習

### ３－３－１．練習の改訂方針

練習は、文型の形や使う語彙を確認し、それを使って自分のことが話せるようになることを目標にしている。また、相手の話を興味を持って聞き、理解し合うことも目指している。

「新文化」では文型定着のための代入練習が中心であったが、「改訂版」では学習者が自分自身のことを話す練習を増やした。さらに、本文や文型からの発展的な練習として「友達と話そう」「チャレンジ！」という新たなタイプの練習も作成した。

### ３－３－２．改訂された練習

（１）「新文化」の練習の見直し

「改訂版」で見直し作成した練習は概ね以下の３つのパターンに分かれる。

① 例と同じパターンを使って自分のことを話す
② 代入練習の形式であるが、答えの部分は自分自身のことを言う
③ 例やヒントだけを見て、自由に自分のことを話す

① 例と同じパターンを使って自分のことを話す

代入練習で文型をしっかり定着させた後、例の会話と同じパターンで学習者自身のことも話せるように、「☆友達と話しましょう。」という指示を入れた。例えば、第14課文型４「～たり～たりする」の練習は、まずペアで「例）A：休みの日に、いつも何をしますか。　B：そうじをしたり、洗濯をしたりします。」の下線部分を、絵とキューを見て入れ替え練習し、その後、同じ会話パターンを使って学習者自身が休日に何をするのかということを話す練習である。

練習c　絵を見て例のように言いましょう。　文型 4

例）A：休みの日に、いつも何をしますか。
　　B：そうじをしたり、洗濯をしたりします。

そうじをする／洗濯をする

1．買い物をする／散歩をする

2．本を読む／料理をする

3．テレビを見る／音楽を聞く

☆友達と話しましょう。

（テキストⅠ　第14課　164ページ）

② 代入練習の形式であるが、答えの部分は自分自身のことを言う

第6課文型1は「よく／あまり／ぜんぜん」という頻度を表す文型である。練習aでこの文型の代入練習を行った後、練習bでは学習者自身のことを聞き合う。学習者は下にある絵を参考に「マリーさんはよく本を読みますか。」という質問文の下線部分を入れ替えて、クラスメートに質問をし、答えは「よく／あまり／ぜんぜん」を使って自分のことを話す。

練習a　例のように言いましょう。　文型 1

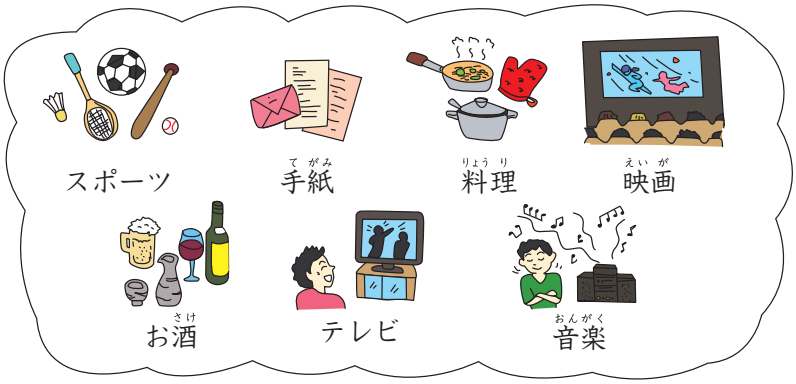
例）本を読みます／いいえ／あまり
　　チン：マリーさんはよく本を読みますか。
　　マリー：いいえ、あまり読みません。

1．スポーツをします／いいえ／あまり
2．テレビを見ます／はい／よく
3．お酒を飲みます／いいえ／ぜんぜん

（テキストⅠ　第6課　72ページ）

練習 b　例のように友達と話しましょう。　文型 1

例）　チン：マリーさんはよく本を読みますか。
マリー：はい、よく読みます。
いいえ、あまり読みません。
いいえ、ぜんぜん読みません。
チンさんはよく本を読みますか。
チン：はい、よく読みます。
いいえ、あまり読みません。
いいえ、ぜんぜん読みません。



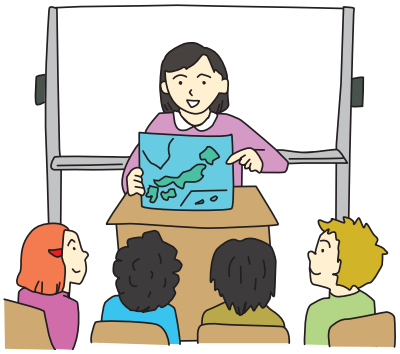

（テキストⅠ　第6課　73ページ）

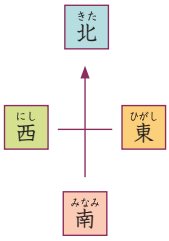
③ 例やヒントを見て、自由に自分のことを話す

第15課練習 c は、文型6「この部屋は台所が広いです。」、文型7「この部屋は三鷹の部屋より駅から近いです。」、文型8「この部屋はみっつの部屋の中で いちばん新しいです。」という3つの文型の練習である。学習者は例を参考に比較の文型を使って自分の国について説明をする。

練習 c　例のようにあなたの国について話しましょう。　文型 6・7・8

例）私の国は日本です。日本は東アジアにあります。中国よりずっと狭いですが、韓国や台湾より広いです。首都は東京です。東京は日本の都市の中でいちばん人口が多くてにぎやかな所です。






（テキストⅠ　第15課　178ページ）

また、第 21 課の練習 c は文型 5「これは、お父さんが作ったトマトです。」（名詞修飾）の練習である。学習者は指示と例を読み、自分の物や写真を持ってきて説明をする。

練習 C　例のように、自分の持っている物や写真を友達に見せて、説明しましょう。　文型 5

例 1）これは、原宿で買った帽子です。デザインが珍しいので、気に入っています。
例 2）これは、私が先月泊まった旅館です。日光にあります。
庭がきれいで、温泉もあって、とてもよかったです。

（テキストⅡ　第 21 課　41 ページ）

このような練習では、既習の語彙や文法だけでは自分が言いたいことが十分表現できないこともある。しかし、自分のことを述べようとすること自体が大切なので、教師は適宜語彙や表現を補足し、学習者の積極的な発話を促すとよい。

（2）新たに加えた練習

「改訂版」では「友達と話そう」と「チャレンジ！」という新たな練習も加えた。これらは、個々の文型にとどまらず、本文や課のテーマを発展させた練習である。

（2）－1．友達と話そう

//友達と話そう// はテキストⅡにのみあるもので、本文や練習で扱ったトピックと関連があることについて、その課の文型にとらわれず学習者が自由に話す練習である。例えば第 21 課のテーマはホームステイで、本文 1 は留学生が日本人家庭にホームステイをする時のマナーについての説明文、本文 2 は台湾人留学生が日本の家庭にホームステイをした時の会話である。これらを発展させ、第 21 課ではホームステイについて話すという練習を設けた。この練習では質問文が挙げられており、学習者はこの質問文に答える形でホームステイというトピックについて自由に話す。

//友達と話そう//

- あなたはホームステイをしたことがありますか。どうでしたか。
- 日本でホームステイをしたいですか。どうしてですか。
- ホームステイで何をしたいですか。

（テキストⅡ　第 21 課　42 ページ）

また、第 26 課文型 2 では「郵便局に転居届を出しておきます。」という文型を学習する。この準備の「～ておく」から発展させ、自由に旅行の準備や地震の備えについて話をする。

**友達と話そう**

- 旅行の前に何をしておきますか。
- 地震の時困らないように、何をしておきますか。

（テキストⅡ　第 26 課　94 ページ）

（2）－2．チャレンジ！

チャレンジ！は、本文や文型で学んだことを使って行う総合的な活動で、さらに運用力を高めることを目指している。

第 34 課では文型 2 で仮定の「～なら」を学習し、練習 b で「～なら」とアドバイスの表現を使って友人におすすめの場所を提案するという練習を行う。そして、その発展として自分の国に遊びに来る友人におすすめの場所を紹介する会話練習が、第 34 課の「チャレンジ！」である。ここでは、あらかじめ自分の国のおすすめの場所について、見どころや名物料理、おみやげなどをメモしておく。それをもとに相手の希望に沿ったアドバイスをする。

このように「チャレンジ！」を行う際には事前準備が必要である。事前準備や授業の進め方については『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ改訂版　教師用指導例集』に記載されている。

## チャレンジ

今度、友達があなたの国へ遊びに行きます。例のように、おすすめの場所を紹介してください。そこはどんな所で、どんな料理がおいしいかなども説明しましょう。

例）（タイで）

タナポーン：来年の夏、日本へ行こうと思っているんです。

佐々木由美：そうですか。

タナポーン：それで、佐々木さんにおすすめの場所を教えてもらいたいんですが…。

佐々木：そうですね。古いお寺や建物を見るなら京都ですが、
きれいな自然を楽しむなら北海道や沖縄がいいと思いますよ。

タナポーン：そうですか。私は自然が好きだから北海道や沖縄がいいですね。
あのう、沖縄はどんな所ですか。

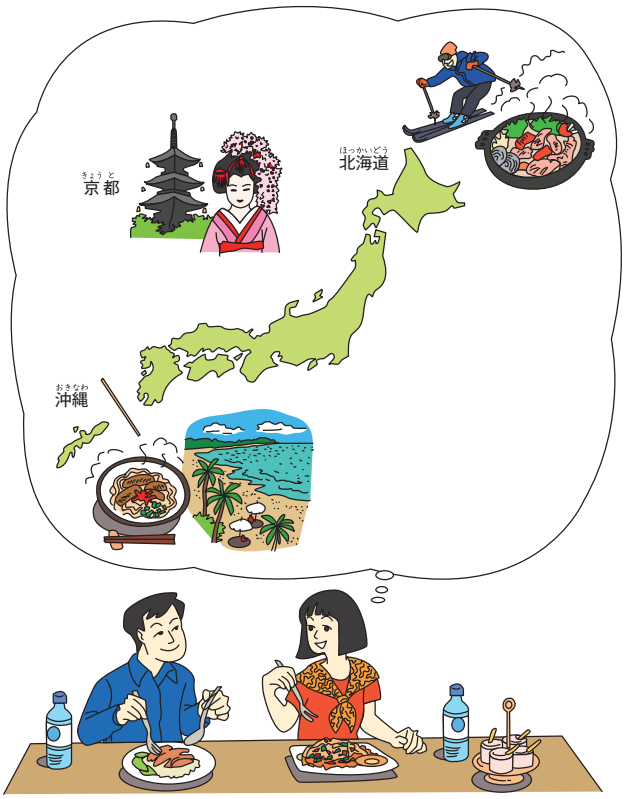
佐々木：きれいな島がたくさんあって、泳いだり、ダイビングをしたり
できますよ。

タナポーン：いいですね。沖縄の食べ物はどうですか。

佐々木：沖縄にはいろいろなおいしい料理がありますよ。

タナポーン：そうですか。

佐々木：沖縄料理を食べるなら、ぜひぶた肉の料理を食べてください。
とってもおいしいですよ。




（テキストⅡ　第34課　168 - 169ページ）

### ３－４.「ことば」と「参考」ページについて

「改訂版」では、学習者がまとめて覚えたほうがいい語彙を ことば としてまとめて提出した。また、間違えやすい文型などをまとめた 参考（さんこう） ページも設けた。教師が指導する際や学習者が復習する際に効率的に使えることを目的として作成したページである。以下がそのリストである。

＜ことば＞
第 11 課　家族の呼び方
第 12 課　料理の言葉
第 16 課　体の言葉　病気の症状　薬の種類・病院で使う言葉

＜参考＞
第 21 課
～てはいけません　～てもいいです　～なくてはいけません　～なくてもいいです
第 24 課
あげる　もらう　くれる
第 28 課
～てあげる　～てくれる　～てもらう

## ４．授業の進め方の例

ここでは第 13 課を例に指導の流れを見ていく。

本校では各課の指導は標準的には次のような進め方をしている。まず本文１で提示した文型を学習し、練習を行う。その後、本文１の学習に入り、本文２、本文３についても同様に行う。このように文型→練習→本文の流れで学習を進めることで、本文の内容や文型の使用場面がより正確に理解できる。

授業ではまず、本文の理解に必要な文型を学習する。第 13 課で学習するのは、感想や理由を尋ねたり、答えたりする際に使用する基本的な文型である。

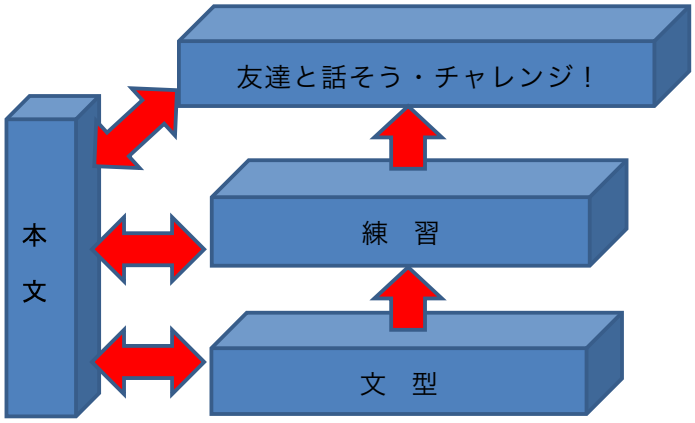
練習ａ～ｄは各文型の導入後に行う。文型が使用される場面や、その際に使用する語彙なども学習し、短いディスコースの会話練習を行う。このような口頭練習を十分にしたうえで、各本文の学習に進む。本文１、２ではインタビューの際の切り出し方や、自分の身分の示し方、質問の切り出し方、受け答えなどを学習する。そして、本文３は、本文１、２でインタビューをした留学生二人が日本語学校の教室に戻って、クラスメートに結果を報告している場面であるが、この本文では、発表の構成（切り出し、結果の報告、感想）を学習する。

最後に「チャレンジ！」として「インタビューをして発表しましょう。」という練習がある。この「チャレンジ！」では学習者はこの課の本文や文型、練習で学習したことを応用して、

自分たちが関心を持っているテーマについて質問を作り、それを日本人にインタビューし集計して、発表をする。

本校では、第 13 課の学習に入る時に、実際に学習者自身がインタビューや発表をすることを告知しておき、学習に対する意欲を高めておく。第 13 課の文型や本文などの学習が終わった後、学習者はグループに分かれてテーマを決め、同じキャンパス内の系列校の日本人学生にインタビューをする。学習者が選ぶテーマはファッション、音楽、休日の過ごし方など、バラエティーに富んでいる。

インタビュー後は視覚資料を作成したり、発表の練習をしたりするが、このような活動の際の話し合いなども学習者にとっては日本語を使用する大切な機会である。そして、本文同様、クラスの中で発表する。本校の場合は、この活動以前にも自己紹介などいくつか発表の活動を行っているが、自分自身のことではなく調べたことを報告するという発表は初めてであり、学習者も意欲的に取り組んでいる。




このように「改訂版」の各課では、まず「文型」でその課の目標達成に必要な文型や関連のある文型を学習する。「文型」の学習の際に「練習」をすることにより、学習したことを確実に定着させ発話へと結びつける。その後、「本文」の学習で、「文型」や「練習」で学んだことを具体的な場面において理解し、発話できるようにする。上の図で示したように、「文型」「練習」「本文」は相互に関連し合って、学習した文型を正確に理解し表現できる構成になっている。さらに「チャレンジ！」や「友達と話そう」で、学習した内容を実際に体験したり、表現したりすることで、より総合的な運用力の向上を目指している。

## 5．おわりに

以上のように、「改訂版」は、これまで本校で出版してきた初級の教科書の特長を引き継ぎつつ、より理解しやすく運用力が高められることを目標に様々な面から見直し改訂した教科書である。改訂にあたり、これまでご意見、ご助言をくださった方々に感謝申し上げると共に、今後も国内外で広く使っていただき忌憚なきご意見をいただければ幸いである。

## 参考文献

国頭美紀・廣田周子・西村学 (2000)「『新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』作成報告および紹介」『文化外国語専門学校日本語課程紀要第 14 号』文化外国語専門学校

## 資料　「新文化」「改訂版」　文型対照表

・「新文化」と「改訂版」の欄の数字は提出課を表す。
・「－」は、その文型が扱われていないことを表す。
・数字の後ろに（本文）とあるものは、本文に提出されていることを表す。
・「中級Ⅰ」は『文化中級日本語Ⅰ』を表す。

| 文型 | 新文化 | 改訂版 |
|---|---|---|
| 見える／聞こえる | 31 | 教室の言葉 |
| 時間 | 1 | 生活の言葉 |
| 月日　曜日 | 1 | 生活の言葉 |
| N1 は N2 です。 | － | 1 |
| 動詞 | 6 | 2 |
| を（目的語）／疑問詞「何」 | 6 | 2 |
| へ（方向）／疑問詞「どこ」 | 6 | 2 |
| で（場所） | 6 | 2 |
| に（時間）／疑問詞「いつ」 | 6 | 2 |
| 物の名前 | 2 | 3 |
| N じゃありません。 | 2 | 3 |
| の（所有）／疑問詞「誰」 | 2 | 3 |
| これ／それ／あれ（眼前指示） | 2 | 3 |
| も（並列） | 2 | 3 |
| い形容詞　な形容詞 | 4 | 4 |
| いＡ＋Ｎ　　なＡ＋Ｎ | 3 | 4 |
| このＮ／そのＮ／あのＮ（眼前指示） | 3 | 4 |
| 疑問詞「どれ」 | 3 | 4 |
| の（体言相当） | 3 | 4 |
| N1（場所）に　N2 はありますか | 5 | 5( 本文 1) |
| V ません | 6 | 2 |
| V の（名詞化） | 11 | 6 |
| V ました／ませんでした | 7 | 2 |
| 時の言い方（先週、今週、来週…） | 9 | 7 |
| 貸す／借りる | － | 7 |
| N じゃありませんか | 7 | 7( 本文 3) |
| 何か／どこか／どこかへ | 7 | 9 |
| V1 ながら V2 | 18 | 10 |

| | | |
|---|---|---|
| で（名詞の並列） | 10 | 10( 本文 2) |
| い A く　　な A に（副詞的用法） | 9 | 12 |
| V にくい／やすい | 13 | 14 |
| N1 も N2 も～ | 15 | 15( 本文 4) |
| の（格助詞の後ろにつく） | 13 | 15( 本文 2) |
| 可能形 | 22 | 17 |
| 名詞修飾（人）は～ | 18 | 17 |
| （V た）ことがあります（経験） | 22 | 17 |
| い A くて（理由） | 27 | 17 |
| に（頻度）　疑問詞「どのぐらい」 | 22 | 17 |
| V（辞書形）ことができます | 22 | 17 |
| N なら | 22 | 17( 本文 3) |
| V ませんか | 17 | 18 |
| （基本体）んですが、 | 17 | 18 |
| V ましょうか／ V ましょう | 15 | 18 |
| （基本体）そうです　（伝聞） | 17 | 18 |
| （基本体）でしょうか／（基本体）だろうと思います | 17 | 18 |
| （基本体）と言っていました | 17 | 18 |
| （基本体）でしょう | 17 | 18( 本文 1) |
| い A くする　　な A にする | 31 | 19 |
| V ために／ N のために（目的） | 33 | 20 |
| ～ば | 22 | 20 |
| 知っています／知りません | 19 | 20 |
| N 1 という N2 | 19 | 20 |
| V の（名詞化） | 18 | 6 |
| ～たら（順序） | 31 | 21 |
| ～しか…ない | 28 | 21 |
| 何か～こと | 23 | 21( 本文 2) |
| い A そうです（外観） | 23 | 22 |
| な A そうです（外観） | 23 | 22 |
| V そうです（兆候） | 23 | 22 |
| Nがほしい | 23 | 22 |
| N1（人）に N2 をあげる | 24 | 22 |
| N1（人）に N2 をもらう | 24 | 22 |

| | | |
|---|---|---|
| Nをほしがる | 23 | 22 |
| NをVたがる | 23 | 22 |
| （基本体）んじゃなくて、～んです | 26 | 22 |
| あんなN | 23 | 22( 本文 1) |
| V てきた | 18 | 23 |
| V（辞書形）ようになった | 24 | 23 |
| V なくなった | 24 | 23 |
| （基本体）し、（基本体）し～ | 13 | 23 |
| V（辞書形）こともある | 26 | 23( 本文 3) |
| インフォーマルの会話１ | 25 | 24 |
| インフォーマルの会話２ | 25 | 24 |
| インフォーマルの会話３ | 25 | 24 |
| N1（人）に N2 をくれる | 25 | 24 |
| ～けど（逆接） | 25 | 24 |
| 自動詞と他動詞 | 26 | 25 |
| V ても～（逆接） | 26 | 25 |
| V ている（結果の残存） | 27 | 26 |
| V ておく | 27 | 26 |
| （基本体）ように | 27 | 26 |
| （V た）まま～ | 27 | 26 |
| ～でもいい | 35 | 27 |
| ～ば（条件） | 35 | 27 |
| （Vる）ところだ | 35 | 27 |
| V そうです／そうにありません（実現の可能性） | 35 | 27 |
| V てしまう（完了） | 35 | 27 |
| どんなに　V ても～ | 35 | ― |
| V て／ V なくて（理由） | 34 | 29 |
| お V（ます形）ください | 21 | 30 |
| （基本体）ようだ／みたいだ | 32 | 31 |
| （基本体）のに、～ | 32 | 31 |
| ～たら（驚き） | 32 | 31 |
| 受身形（直接　間接） | 32 | 31 |
| Vてある（結果の残存） | 32 | 31( 本文 1) |
| 受身形（無生物主語） | 33 | 32 |

| | | |
|---|---|---|
| N のようだ／ N みたいだ | 31 | 32 |
| N のように／ N みたいに | 33 | 32 |
| V ているところだ | 33 | 32 |
| Vことになっている | 31 | 32( 本文 1) |
| はーが構文（取り立ての「は」） | 33 | ー |
| N ばかり／ V てばかり | 34 | 33 |
| 使役形 | 34 | 33 |
| ～たらどうですか | 34 | 33 |
| 使役受身形 | 36 | 34 |
| V なら～ | 31 | 34 |
| Vてある（状態） | 36 | 34 |
| （基本体）はず | 19 | 中級Ⅰ |
| V ている（結果の残存） | 35 | 中級Ⅰ |
| 使役形＋させていただきたい | 35 | 中級Ⅰ |
| ～うちに | 36 | 中級Ⅰ |
| 時間（１分単位） | 10 | 巻末 ( 助数詞表） |
| もっと | 12 | ー |